

## 初心は遠くなりにはけり…？

東京大学大学院アジア文化研究専攻

廖 嘉祈

「なんで日本思想史を研究しようと思ったのですか？」——財団の面接でも、このような質問をいただいたような気がする。しかし、正直のところ、それは今の自分でもよく分からない。初心を忘れないことを世間では通常よしとするようであるが、自分は、いまや「初心は遠くなりにはけり」という状態にあるのかもしれない。興味の赴くがままに進んでいったら、いつの間にかここまで来たというのが、偽らざる実感である。そうした時、上記の問いに対する自身の答えは、所詮はすべて後付けの論理に過ぎないのではないかとつくづく感じられる。そう思うあまり、懊悩に耽ることも、一再ではなかった。

とはいえ、おぼろげながら、自分の答えのなかには、真実のかけらもまた潜んでいるように思う。例えば、「美しい本とともにいられる仕事につきたい」という願望である。博士論文を書く時、フォントのことばかりが気になり、ダークモードのワードファイルのなかで浮かび上がる文字列の美しさに愉悦を感じては、およそ千年前の中国の宋代に出版された、木版印刷の本の版面に魅せられる、というあり様である。はじめての投稿論文が出た時、自分の書いたものがこうして活字になるのだという素朴な感動は、いまでも忘れられない。稚拙すぎる考えで大変恥ずかしいのであるが、博士論文を書いていた時は、これを将来出版する際、どのような装丁にしたらいいかなあと想像しながら、自分を励ましていた。よほどこだわりがあるということであろう。和本・漢籍・洋書にわたる様々な書物と、日常的に接することができる近世日本思想史研究に足を踏み入れたのは、まずはこのためなのかもしれない。

こうして見れば、自分はいわゆる「書痴」という部類に入るかと思う。しかし、当然ながら、それはいいことばかりではあるまい。本を愛するあまり、それを蒐集しようとする欲が膨れ上がったら、それこそ收拾がつかなくなる。「玩物喪志」という熟語がある。それは、必要の無いものに夢中になって、大切なことをなおざりにすることを謂う。自分が持っているわずかなお金を蕩尽することもむろんデメリットであるが、何よりも、底無き物欲という業火に焼かれてしまうことが怖い。自分のほしい書物——それは時には博士論文を書く上での重要史料だったりする——が、誰かに先に買われてしまった時の悔しさには、なんとも名状しがたいものがある。それを運命として割り切れなければ、精神衛生上よろしくない。しかし、いまの自分は、いまだそうした境位にはほど遠いように思われる。

そして、「書痴」に陥ってしまうもう一つのリスクは、生身の人間に対する関心がいつしか薄れてしまうことであろう。人文学が人間の営みを対象とする以上、人間に対する興味を失ってはいけないのである。幸い、自分はそうはなっていないようである。資料調査に出かける時、昼間はきちんと仕事をし、夜は居酒屋に潜り込み、地酒を片手に、地元民と楽しくしゃべるのが定番である。大阪大学に留学していた時期、毎週のように徹夜麻雀に興じ、京都の友達と一緒に鴨川沿いに繰り出してワイワイしたのも、また良い思い出である。思うに、多様な人間に接することが楽しく感じられるかぎり、「足で稼が

なければならない』と言われることもある近世日本思想史研究という大海原を、私はこれからも泳ぎ続けることになるであろう。書齋に閉じこもって、黙々と机に向き合う仕事は、もとより自分の気性に合わないのかもしれない。

などと、つらつら振り返ると、なかなか感慨深いものである。もしこの十数年間で成長したところをひとつ挙げるとすれば、書物自体への狭い執着から解き放たれて、書物の背後にある人間——それは書かれた内容に出てくる人間だったり、書物そのものを大事に伝承してくれた人間だったり——へと、関心が拡大していったことが挙げられよう。至極当たり前のことであるが、人間なくして、書物が生まれることはないのである。

この本業であり、道楽(?)でもある研究を続けてこられたのは、財団の皆様をはじめ、数え切れない多くの方々の賜物である。感謝の気持ちを常に胸に秘めつつ、初心が明瞭なかたちで脳裏に蘇る日を、これからも楽しみにしていきたい。